



# 糸賀一雄らの「ヨコへの発達」をめぐる対話：領域横断による読み解き：糸賀・田中・岡崎による結像／近江学園・びわこ学園の実践／アメリカの学説

渡部, 昭男

國本, 真吾

垂髪, あかり

森, 和宏

清水, 貞夫

---

## (Citation)

日本教育学会大会研究発表要項, 81

## (Issue Date)

2022-08-24

## (Resource Type)

research report

## (Version)

Accepted Manuscript

## (URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476308>



糸賀一雄らの「ヨコへの発達」をめぐる対話：領域横断による読み解き  
—糸賀・田中・岡崎による結像／近江学園・びわこ学園の実践／アメリカの学説—

企画者・司会者：渡部昭男 (大阪成蹊大学／元神戸大学／鳥取大学・名誉)

國本真吾 (鳥取短期大学)

報告者：○垂髪あかり (神戸松蔭女子学院大学) ○森 和宏 (東京大学・大学院)

○清水 貞夫 (宮城教育大学・名誉)

日本教育学会近畿地区主催のオンライン企画「糸賀一雄の思想と実践」(2021.3.30)では、糸賀一雄研究会著『糸賀一雄研究の新展開：ひとと生まれて人間となる』(三学出版 2021)に執筆した三氏にご登壇いただき、「糸賀一雄の思想と実践」について読み解きを進めた。次に、そこで出された重要テーマ「可能性」「ケア」「生産性」「共生」「尊厳」などの内から特に「生産性」に焦点をあてて、日本教育学会第 80 回大会の RT 企画 (2021.8.25)「糸賀一雄の『生産性』をめぐる対話」を開催し、ゲスト二氏を含む四氏による領域横断による対話を深めた (文献 1・5)。今回は、糸賀一雄らの「ヨコへの発達」概念に着目して、糸賀一雄・田中昌人・岡崎英彦による「ヨコへの発達」の結像、近江学園・びわこ学園での実践展開、米国における学説についての話題提供を得て、重症児教育学、教育史学、米国学説史研究による対話をさらに深めたい。

**1. 重症児教育学の立場から：垂髪あかり「〈ヨコへの発達〉結像とその後・びわこ学園を中心に」**

近江学園 (1946-)、びわこ学園 (1963-) などの実践から 1966 年、〈ヨコへの発達〉という考え方が結像する。子どもの内面をみたいという素朴な願いから始まった、糸賀、岡崎らによる療育実践と田中の発達研究の往還により結像した〈ヨコへの発達〉は、発達保障思想の形成に重要な役割を果たした。障害の重い子どもの「生命の保障」の先にある存在価値を表す鍵概念として使用された「発達」は、能力の高次化という「縦 (縦軸, タテ)」方向の意味に対して、「かけがえのない個性の拡がり」という「横 (横軸, ヨコ)」の意味合いが強く込められていた。それは能力や生産性に価値を置く社会に対して、「人格的な絶対的な価値」を提起するものであった (文献 2)。

それから半世紀、〈ヨコへの発達〉は重症児療育の現場でどのように継承され、実践化されてきたのかについて、びわこ学園の協力を得て研究を進めている。〈ヨコへの発達〉を中核とする発達保障の思想は、現在においても学園の療育実践を支える礎となり、「いのちと暮らしに寄り添う支援」という学園の実践理念や各職員が利用者に向き合う姿勢、療育実践内容に具現化されている。

〈ヨコへの発達〉研修会 (2022.2) では、びわこ学園職員らが、日々捉えている障害の重い人の個性の拡がりや自己実現の姿が、糸賀、岡崎、田中が悩み苦しみ、葛藤しながら見出した〈ヨコへの発達〉の結像過程と重なることが共有された。〈ヨコへの発達〉は「重症児者の変容を捉える眼差し」であり、自らの価値観と「対決」する概念でもあることを理解した現代の職員らは、時代を超えて先人たちの苦闘と実践のプロセスを「追体験」していることが明らかになっている。

**2. 教育史学の立場から：森和宏「近江学園の実践における『ヨコへの発達』の発見」**

本報告では教育史、とりわけ教育実践史の観点から、近江学園の実践に即して「ヨコへの発達」概念の形成過程をたどる。「ヨコへの発達」と「集団の中での活動」との関連を示唆した加藤直樹の議論を引き受け、実践における集団編成に着目する。そうして実践記録を読みなおしたとき、

「ヨコへの発達」の萌芽を初期の実践にも見出すことができる。初期の職業教育では、普通児（養護児）と知的障害児による協働的な実践が取り組まれた。その記録のなかで職員たちは、個人の能力の面では成長がみられない知的障害児について、普通児との協働においては作業の「進歩」がみられることを既に記述していた。その後、1960年代に入って学園は「発達保障」を掲げ、子どもの発達段階に依拠した集団編成を導入した。なかでも障害の重い子どもたちからなる「第一教育部」の実践をとおして、障害の重い子どもたちにも、「できないことができるようになる」のとは違う発達の「ひろがり」があることが、職員たちに意識されるようになり、「ヨコへの発達」概念の中核となる認識が築かれた。「ヨコへの発達」が実践の目標の一つとなった1968年には、子どもどうしのかかわりをより深めるために、多様な発達段階の子どもたちで生活集団を編成する「ミックス編成」を導入した。実践において職員たちは友だち関係の充実に取り組み、年齢の近い友だちとの関係のなかで、子どもたちは「ヨコへの発達」をとげた。また、多様な子どもたちがかかわりあう実践をとおして、差別や偏見を乗り越え、互いに仲間として認め合う関係を築くことをも「ヨコへの発達」として捉えようとする新たな見方が生まれつつあった。（文献3）

### 3. 米国学説史研究の立場から：清水貞夫「W. C. Bagley の〈タテ/ヨコの発達〉論との比較」

①米国で進歩主義教育と対立してエセンシャルリスト宣言を出した W. C. Bagley の〈タテ/ヨコの発達〉論を紹介する。②Bagley は、1920年代戦前半、知能検査を米国で普及させたターマンらと論争した。その主張は“Determinism in Education”（1925）に纏められている。③Bagley の主張は、「G 知能の基礎となる構造や機能の自然的成熟の発達、これを便宜的に vertical growth と呼ぶ。それとは対照的に、経験の獲得と構成に由来する発達がある。それは現実との直接的かかわり、あるいは社会的遺産との間接的な接触によるものである。この種の精神発達を horizontal growth と呼ぶ」[horizontal growth は基本的には限界がない]④Bagley の〈ヨコの発達〉論は、IQ の恒常性、生得性、遺伝性を基にした等質学級編成、人種間差異論、優生学等の主張に対抗して提起された。経験の再構成過程が〈ヨコへの発達〉であり、その蓄積が精神発達の高次化（タテへの発達）に転化すると理解された。⑤Bagley の主張は、ターマンらの主張が民主主義の基礎としての教育の役割を矮小視するのに抗して、公教育の平等化機能を意識したものであった。⑥日本の〈ヨコへの発達〉論は、重度・重症障害児に対する療育活動を通して、彼/彼女らも発達する存在であることが認識され概念化された。就学猶予・免除された障害児を教育や福祉の対象とする認識を切り開いた。⑦Bagley の米国教育史上での業績は D. Ravitch（『学校教育改革抗争の100年』）により評価されているが、そこには彼の〈タテ/ヨコの発達〉論は登場しない。（文献4）

#### 【参考文献】

- 1.渡部昭男・國本真吾・垂髪あかり編／糸賀一雄研究会著『糸賀一雄研究の新展開：ひとと生まれて人間となる』三学出版、2021
- 2.垂髪あかり『〈ヨコへの発達〉とは何か：障害の重い子どもの発達保障』日本標準、2020／同『近江学園・びわこ学園における重症児者の「発達保障」：「ヨコへの発達」の歴史的・思想的・実践的的定位』風間書房、2021
- 3.森 和宏「近江学園における『ヨコへの発達』概念の再検討：実践における集団編成に着目して」『教育学研究』88(4)、2021
- 4.清水貞夫「書評垂髪あかり『近江学園・びわこ学園における重症児者の「発達保障」』」『研究論叢』(28)神戸大学教育学会、2022
- 5.特設サイト『糸賀一雄研究の新展開：ひとと生まれて人間となる』國本主宰 <https://sites.google.com/view/itogakenkyubook/>